

保育におけるオノマトペの教材化

— オノマトペかるたを作成して —

The use of onomatopoeia in teaching materials for early childhood education :

Creation of onomatopoeic playing cards (Karuta) by the students majoring
in early childhood education

松 崎 史 周

MATSUZAKI Fumichika

Abstract

This paper describes the use of onomatopoeia in childcare and education and onomatopoeic playing cards (Karuta) in early childhood education and its problems, reports the experience of the creation of Karuta by the students majoring in early childhood education, and gives examples of Karuta created by them. Onomatopoeia is frequently used in the language of children and caregivers and promotes a child's linguistic expressions. As a matter of fact, onomatopoeia has been incorporated in Japanese language classes and utilized as a means of learning other subjects in elementary schools; it is considered useful for childcare and education. Karuta is a material that can foster language ability of young children. However, commercially available Karuta cards are not enough to develop daily-life expressions and vocabulary of young children. On the other hand, it is considered that onomatopoeic Karuta can be a material for early childhood education. Therefore, we included the creation of onomatopoeic Karuta in the class syllabus for early childhood education. In each reading card, a poem with three lines of 5-7 syllables containing onomatopoeia in the first line was included. These cards were written in the Japanese syllabary characters (Hiragana) and it was permitted to start a poem with a voiced consonant and semi-voiced consonant. Picture cards for touching were created to clearly represent the meanings of onomatopoeia.

Keywords : *onomatopoeia, playing cards (Karuta), creating teaching materials, early childhood education*

I. はじめに

平成29年に改訂・告示された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領には、3歳以上児の領域言葉の「ねらい」として、次の3点が示されている⁷⁾。

- (1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- (3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語に親しみ、言葉に対する感覚を

豊かにし、先生(保育士等)〈保育教諭等〉や友達と心を通わせる⁸⁾。

幼児期に育みたい言葉の資質・能力が幼児の生活に即した形で示されているが、今回の改訂では、「ねらい」の(3)に「言葉に対する感覚を豊かにし」という文言が加えられ、言語感覚の育成が幼児期の言葉の保育・教育に明記されることとなった。

これに連動して、「内容の取り扱い」に以下の内容が加わっている⁹⁾。

- (4) 幼児(子ども)〈園児〉が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。

日本女子体育大学 (非常勤講師)
国土館大学 (准教授)

ここには、言葉の響きやリズムを感じながら表現する楽しさを味わうことが、言葉を獲得・拡充していく幼児にとって重要であり、日常の園生活における様々な活動はもちろんのこと、絵本や物語、言葉遊びなどを通して、響きやリズムの良い言葉に触れ、言葉に対する感受性を高めながら語彙を拡充していくという方向性が示されている。

リズムやテンポを有し、音韻的にも響きの良い語彙といえば、オノマトペが挙げられる。オノマトペとは擬音語・擬態語の総称で、「トントン（戸を叩く音）」「ニャーニャー（猫の鳴き声）」などの音や声を表す擬音語、「ざわざわ（騒がしい様子）」「そわそわ（落ち着かない気分）」などの状態や様子、気分などを表す擬態語に分けられる。動作や状態を感覚的に捉えたオノマトペは、習得語彙の少ない幼児・児童にとっても理解しやすく、使用しやすい。幼児の言葉に対する感受性を豊かにし、幼児期の生活表現の伸長を図るためにも拡充を図っていききたい語彙であるが、オノマトペによる幼児の言語感覚の育成と語彙の拡充はどのようにしていけばいいのだろうか。本稿では、その一方策としてオノマトペの保育教材化を提起していくこととする。

以下、次のような流れで論を進める。まずは、先行研究レビューを通して、保育・教育におけるオノマトペの扱いを確認し、オノマトペの保育教材化の有用性を示していく。次に、保育教材としてのかかるたの現状と問題点を確認して、保育教材としてオノマトペかかるたを作成することの必要性を示していく。そのうえで、オノマトペかかるた作成の過程を説明し、保育学生が作成したかかるた札の紹介を行って、最後に本稿のまとめと今後の課題を挙げる。

II. 保育・教育におけるオノマトペの扱い

オノマトペは動作や状態を感覚的に捉えたもので、語彙の少ない幼児にも理解しやすく、言語獲得期にある幼児はオノマトペを多用する傾向にある。就学前幼児の語彙を調査した大久保・川又（1982）によると、4人の6歳児が1日に発した自立語は異なりで3,642語、延べで38,490語であったが、そのうちオノマトペは異なりでは504語と総語数の13.84%を占め、延べでは1,216語と総語数の3.16%を占めている¹⁰⁾。幼児の発話におけるオノマトペの比率は名詞や動詞ほどは高くはないものの、形容詞・形容動詞よりは高く、動詞などに比べても様々な語が使用されていることがわか

る¹⁰⁾。

保護者や保育者も幼児と接する際にオノマトペを多用するが、保育者の言葉かけにもオノマトペがよく見られる。作野（2015）は3歳児クラスの保育者の言葉かけからオノマトペを採集・分析しているが、保育者は製作活動やプール活動の場面でオノマトペを使用することが多く、幼児一人一人が活動する場面で、クラス全体に言葉をかける際にオノマトペを使用している¹¹⁾。また、原子・奥野（2007）は、絵画および制作指導、リズム運動、歌唱場面、保健指導の4つの保育指導場面において、保育者が使用したオノマトペとそれに対する年少・年中・年長児の反応を観察しているが、保育者は動作や動きの状態を表す際にオノマトペを多用しており、オノマトペの使用に伴って幼児の反応がスムーズになって、幼児の理解も促進されたとしている¹²⁾。なお、身体表現の指導については、オノマトペを用いた言葉かけが幼児に様々なイメージを持たせ、豊かな表現活動を行うことにつながるという指摘もなされている¹³⁾。

このように、オノマトペは幼児の発話にも保育者の言葉かけにも多く現れ、幼児の理解を促進し、幼児の表現活動を引き出すきっかけとなっている。保育におけるオノマトペ活用の有用性が認められるが、オノマトペの活用は小学校教育においても図られている。

小学校教育におけるオノマトペの活用は、体育・音楽・理科（生活）・国語など様々な教科でなされている。佐野・岡林（2019）は、小学2年生の授業において、オノマトペを組み合わせて民族音楽のリズムを作り、それを民族楽器で演奏するという実践を行っているが、児童はオノマトペの持つリズム感をもとに生き生きとしたリズムを表現することができたとしている¹²⁾。また、池田・戸北（2005）は、生活科における低学年児童の観察や振り返りの表現に見られるオノマトペを調査・分析したもののだが、児童は対象の触覚的感覚を表す際、難解な語句を使わなくては表現しにくい場合にオノマトペを使用する傾向が強く、オノマトペが低学年児童の「知的な気付き」を見出す手掛かりになるとしている¹⁴⁾。

このように、オノマトペが持つリズム感を活用して児童の音楽表現を引き出したたり、オノマトペを指標に児童の気づきを捉えたりと、オノマトペが様々な教科で活用されていることがわかる。オノマトペの学習の手段としての有用性が認められるが、言葉が学習の中心となる国語科ではどのように扱われているのか、教

科書での扱いを見ていく。

小学校国語科では言葉の知識・理解としてオノマトペを学び、オノマトペを活用して「読むこと」「書くこと」の学習を行っている。教育出版第2学年用の教科書では、語例を挙げながら擬音語・擬態語について説明し、オノマトペの意味・用法を考える設問を置いている。擬音語を「音をあらわす言葉」、擬態語を「様子を表す言葉」と呼び、擬音語はふつうカタカナで書かれ、擬態語の多くはひらがなで書かれるとしたうえで、清濁や単複による意味の違いを考えさせたり、適語補充や単文作成を行わせたりしている⁵⁾。

「読むこと」の学習でオノマトペが問題とされるのは、主に物語や詩歌などの文学的文章である。文学的文章では、人物の様子や心情を表す語としてオノマトペが使われることがある。教材文に見られるオノマトペが読みを深める場合、そのオノマトペに着目して人物の様子や心情を捉えていくようにしていくとよい。教育出版第2学年用教科書に掲載の「かきこじぞう」は、じいさまやじぞうさまの様子がオノマトペを用いて効果的に描写されているが、学習の手引きには本文中のオノマトペがどのような様子を表すのか考えるように指示がなされている⁶⁾。また、「書くこと」の学習では、オノマトペが事物の様子を詳しく描写する方法の一つとして示されている。東京書籍第2学年用の教科書では、身近な植物を観察して、気づいたことを記録した文章を書く単元が設定されているが、植物を観察する観点として「色」「形」「大きさ」が挙げられ、葉の形状や触覚的感觉をオノマトペで示した模範文が挙げられている¹³⁾。

このように、小学校国語科では学習内容としてオノマトペを学び、それを利用して「読むこと」「書くこと」の学習を進めている。国語科においてもオノマトペの有用性が認められるが、小学校の様々な教科においてオノマトペを活用していることを踏まえると、国語科においてオノマトペの機能や用法について理解を図り、言葉の認識を深めるとともに、それと接続するような形で、領域言葉でもオノマトペを取り上げ、言語感覚や表現力の育成を図っていくことが非常に重要になってくる。ただ、国語科においてはオノマトペを学ぶための教材が用意されているが、保育においては絵本や物語などの児童文化財が利用できるものの、オノマトペを楽しみながら学ぶための専用の教材はほとんど見られない。オノマトペを通して言葉の感受性を育み、幼児の語彙の拡充につながるような保育教材が必

要とされていると言えよう。

III. 保育教材としてのかるたの現状と問題点

かるたは日本の伝統的な遊戯の一つで、凧揚げや福笑いなどとともに正月遊びの定番とされている。かるたの種類は多岐にわたるが、代表的なものに百人一首かるた、いろはかるた、さらには郷土かるたや方言かるた、ことわざかるたなどがある。保育の現場では、正月遊びとして年始めに集団で行うことが多いが、幼児自身が個人または小集団で楽しむこともあり、自らの生活を題材にしてかるたを作成する活動も行われている⁴⁾。

かるた遊びは聴覚刺激(読み句)と視覚刺激(絵札)が伴って成立するものである。読み句を聞き取ってそのイメージの絵を探すという特性が、幼児の言葉の認識を深めたり、読み句やそこに含まれる語句を覚えることにつながったり、文字に興味を持つきっかけを与えたりする。また、文字に興味を持ち始めた幼児は、かるた遊びを通してその興味を深め、文字の読み書きにつながる文字意識を養っていく⁶⁾。保育教材としても古くから利用され、池田(2012)によると、大正・昭和初期には、幼児のために童話を題材にしてかるたが作成されたり、幼児自身がかるたを作成する活動がなされていたりと保育の現場でかるたが活用されていた。また、かるた遊びを通して言語能力の向上を図ることに目が向けられており、言葉の指導につながる保育教材としてかるたを活用し、幼児の言葉の認識を育てていく方向性も示されていた³⁾。

だが、現在では正月遊びとして行うことが中心となっており⁶⁾、幼児の語彙を拡充する保育教材として十分活用されているとは言いがたい。かるたの他に有用な保育教材が数多く存在することもその要因だが、既成のかるたに見られる問題点もその要因として指摘できる。

例えば、代表的なかるたとして、百人一首かるたやいろはかるた、ことわざかるたが挙げられるが、これらのかるたは幼児にとって内容的に親しみが薄く、理解できない語句も多く見られる。音韻的な響きやリズムの良さから読み句が覚えられ、繰り返し遊ぶことを通して幼児でも楽しめるようになる面はあるが、すべての幼児が無理なく遊べる保育教材としては不向きである。

また、幼児向けかるたとして、絵本や童話を題材にしたかるたや文字習得用のかるたが挙げられるが、これらのかるたには幼児が理解できない語句は見られないものの、作品内容をモチーフにしているため、作品の内容や表現を覚えていることが前提となっていたり、文字習得に特化するあまりに、語彙的に特徴の薄い読み句となっていたりして、すべての幼児が無理なく遊ぶことができ、幼児の語彙を拡充していく保育教材としては不向きな面がある。

すべての幼児が無理なく遊べ、幼児の言語感覚を養い、生活表現を伸長させ、小学校での学習の素地となる語彙を拡充する、これらの要件を満たす「保育教材としてのかるた」の一つとして、オノマトペを題材とした「オノマトペかるた」が挙げられるだろう。幼児・児童向けオノマトペかるたの作成は、すでに藤野(2016)で試みられているが、絵が描かれたカードとオノマトペのみが記されたカードを取って物語を作るというもので、一般のかるたとは形式も遊び方も異なっている。幼児の想像力や表現力を養うという点では優れているが、リズムやテンポ、言葉の響きに課題があり、一般のかるたとの連続性も薄くなっている。そこで本稿では、かるたの形式や遊び方は一般のかるたを踏襲し、オノマトペの特性を活かしながら幼児の言語感覚育成と語彙拡充を目的として、幼児向けの「オノマトペかるた」の作成を授業計画に取り入れた。

IV. 保育学生によるオノマトペかるたの作成

2017年度に筆者が担当した授業の各1回を使用してオノマトペかるたの作成を行った(2年生31名、4年生36名)^⑧。作成にあたって、幼児でも理解できるオノマトペを、ひらがな1字につき2語ずつ選定し、各学生に提示した。学生は例語を参考にしてオノマトペを選び、読み句と絵札を作成していった。なお、幼児でも無理なく遊べ、語彙の拡充につながるよう、次の条件を踏まえて作成することとした。

(1) 読み句は五七調の三句構成、句頭にオノマトペを配す

読み句は多くの幼児向けかるたに倣って三句で構成するものとした。また、五七調の読み句は音韻的に響きがよく、それゆえに記憶にも残りやすいため、五七調を基本としつつもオノマトペの音数や語呂のよさを

勘案して作成することとした。さらに、読み句に配すオノマトペの位置は最初の句(句頭)とした。オノマトペを句頭に置くと、読み句の内容や構成が制限されるが、句頭に置くことにより、どれがオノマトペであるか幼児にも分かりやすい。幼児の語彙拡充という目的からも、オノマトペは句頭に置くこととした。

(2) 読み句は濁音・半濁音始まりも認め、ひらがな書きとする

一般にかかるたの最初の句は清音始まりであるが、オノマトペには濁音または半濁音始まりの語も多く、幼児にとって馴染み深い語も多い。幼児向けかるたという性格から、読み句の大半は清音始まりが望ましいが、オノマトペを主題としたかるたという性格も踏まえて、濁音・半濁音始まりも一定数混ざるようにした。また、小学校国語教科書では擬音語はカタカナ書きとされているが、幼児期に興味を持たせ、読み書きにつながる文字意識を深めたい文字種といえはひらがなである。擬音語も含めて読み句の文字種はひらがなとした。

(3) 絵札はオノマトペの意味がよく表れるようにする

絵札はオノマトペの意味が絵からよく読み取れるよう、読み句全体の意味よりもオノマトペの意味を絵で表すものとした。オノマトペの意味以外の要素を描かないことで、オノマトペと絵がよく対応するようになり、幼児がオノマトペとその意味を認識しやすくなる。紙芝居の表画面と同様、離れた所からでもよく識別できるように細部を捨象し、中心位置にオノマトペの絵画化がくるようにした。

学生に提示した例語は、『擬音語・擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』^⑨所収のオノマトペの中から、幼児の発話によく現れる「うきうき」「きらきら」など畳語系のオノマトペを中心にして、幼児にも理解しやすいものを筆者が選定した。「まじまじ」「やいやい」など幼児の生活には現れにくく、幼児が理解しにくい語も含まれているが、小学校以降の学習を見据えて、幼児にとって難しい語もいくつか含めてある。例語は次頁の表のとおりである。

表から分かるように、五十音に準拠して語例を提示しているにもかかわらず、「れ」「ろ」「を」が挙げられていない。日本語において頭音が「ら行」の語は漢語

表 学生に提示したオノマトペ一覧

番号	頭音	オノマトペ例	番号	頭音	オノマトペ例	番号	頭音	オノマトペ例
1	あ	あたふた あっさり	15	そ	ぞろぞろ ぞくぞく	29	へ	へとへと ぺちゃんこ
2	い	いがいが いらいら	16	た	だふだふ たっぷり	30	ほ	ほかほか ぼつん(と)
3	う	うきうき うっかり	17	ち	ちよきちよき ちょこん	31	ま	まじまじ まごまご
4	え	えいえいおう えっへん	18	つ	つるつる つぶつぶ	32	み	みんみん みしみし
5	お	おっとり おろおろ	19	て	てかてか でこぼこ	33	む	むしゃむしゃ むくむく
6	か	かたかた がっちり	20	と	とんとん どきどき	34	め	めぞめぞ めちゃめちゃ
7	き	きらきら きゅっ	21	な	なみなみ なよなよ	35	も	もぐもぐ もたもた
8	く	くるくる くすくす	22	に	にこにこ によきによき	36	や	やっこ やいやい
9	け	げらげら げっそり	23	ぬ	ぬくぬく ぬるぬる	37	ゆ	ゆらゆら ゆっくり
10	こ	ころころ ごしごし	24	ね	ねっとり ねばねば	38	よ	よちよち よれよれ
11	さ	さらさら さっぱり	25	の	のんびり のびのび	39	ら	らんらん ららら
12	し	しとしと しょっとり	26	は	はきはき ばらばら	40	り	りん りんりん
13	す	すいすい すくすく	27	ひ	ひゅうひゅう びかびか	41	る	るんるん るるる
14	せ	せかせか せっせ(と)	28	ふ	ふかふか ふわふわ	42	わ	わいわい わくわく

や西洋語など外来語由来であるため、幼児に馴染みが深い語は「らんらん」「りんりん」「るんるん」程度で極端に少ない。また、頭音が「を」の語も現代日本語には存在しない。こうした理由から、「れ」「ろ」「を」を除いた42音をオノマトペかるた作成の対象とすることにした。

V. 学生が作成したかるた札

2年生により42組、4年生により70組のかるた札が作成されたが、3年生4名が不足分を作成して(18組)、合計130組のかるた札が作成された。得られたかるたは研究室所属学生、幼稚園教諭経験者によって、幼児にも理解されやすい40組の札が選定され、さらに、統一性のある絵札とするため、2名の学生に改めて絵札を



図1 オノマトペかるたの例 (あ行)



図2 オノマトベかるたの例 (な行)

作成してもらい、ワープロソフトを用いて教科書体で読み札を作成した。例として、図1に「あ行」、図2に「な行」の札を挙げる。

完成したかるた札を見ると、一部の札に内容的な重なりが見られるものの、幼児にとって内容的にも語彙的にも理解しやすく、オノマトペの持つイメージ性が読み句にも絵札にもよく表れている。読み句は五七調を意識して作成させたため、五・七・五の三句構成のものが18組と最も多く、全体の45%を占めている。また、五・八・五や五・七・六など1音のみの字余りの句が8組あり、これらをまとめると、定型または定型に近い読み句が全体の65%に及ぶ⁶⁾。定型を意識した読み句は音韻的に響きが良く、幼児にとって聞きやすく、読みやすい。そのため、読み句自体が幼児の記憶に残りやすく、それが絵札のイラストと結び付いて、イメージ性を伴ってオノマトペとその意味が理解されていく。完成したかるた札はまさにこうした特性を持つものであり、幼児の語彙を拡充し、小学校学習の素地作りにつながる保育教材たり得るものになっていると言っていいただろう。

VI. おわりに

本稿では、保育および教育におけるオノマトペの扱い、保育教材としてのかるたの現状と問題点を確認するとともに、保育学生によるオノマトベかるたの作成と完成したかるた札の紹介を行ってきた。本稿の要点

をまとめると、次のようになる。

- (1) オノマトペは幼児の発話にも保育者の言葉かけにも多く現れ、幼児の表現活動を引き出すきっかけになっている。また、小学校では国語科で学習内容として学ばれるとともに、いくつかの科目で学習手段としても活用されており、保育・教育の双方において、オノマトペは教材として有用性が認められる。
- (2) 既成のかるたは、幼児にとって内容的に馴染みが薄く、理解が難しい語句が見られて、保育教材として不向きな面がある。オノマトベかるたは、すべての幼児が無理なく遊べ、幼児の言語感覚を養い、生活表現を伸長させ、小学校での学習の素地となる語彙を拡充する「保育教材としてのかるた」として期待される。
- (3) オノマトベかるた作成にあたって、読み句については濁音・半濁音始まりも認め、五七調の三句構成で句頭にオノマトペを配してひらがな書きすることを条件とし、絵札についてはオノマトペの意味がよく表れるように作成することを条件とした。こうすることで、幼児の語彙を拡充し、小学校学習の素地作りにつながる保育教材たり得るものとなった。

今後は、作成したオノマトベかるたを保育現場で実践し、その効果を検証して改善点を見出していったり、豊語系以外の語形を加えてかるた札を作成して、かるた札のバリエーションを増やしていったりするなどし

て、保育現場で利用できる汎用性の高いオノマトペか
るたにしていきたい。

注

- (1) 幼稚園教育要領の条文を挙げ、保育所保育指針との違いを()、幼保連携型認定こども園教育・保育要領との違いを< >に示した。
- (2) 一般にオノマトペ(擬音語・擬態語)は「副詞」に分類されるが、大久保・川又(1982)では、擬音語は「音まね言葉」として「副詞」から取り出し、擬態語は「副詞」に含めている。本稿では、擬態語を「副詞」から取り出し、「音まね言葉」と合わせて集計している。
- (3) 小川鮎子・下釜綾子・高原和子・瀧信子・矢野咲子(2013)「幼児の身体表現を引き出す言葉かけ—オノマトペを用いた動きとイメージ」『佐賀女子短期大学研究紀要』第47集, pp.103-116など。
- (4) 柴崎真之・戸田雅美・秋田喜代美編(2010)『最新保育講座⑩ 保育内容「言葉」』ミネルヴァ書房, pp.154-159など。
- (5) 成田徹男編(2010)『新時代の保育双書 保育内容ことば〔第2版〕』株式会社みらい, p.187。柚木穂・白崎研司編(1987)『保育技術シリーズII ことばを育てる3—思考力を育てる』コレール社, pp.76-79を参照のこと。
- (6) 正月遊びとしてかたるを行った実践は多数見られるが、かたる遊びを通して伝承遊びに触れること、ルールを学ぶこと、他の子と関わる力を養うことなどが目的とされることが多く、幼児の言語感覚の育成や語彙の拡充を目的とした実践はほとんど見られない。
- (7) ジブリ作品を題材としたかたるの中には、作品内の名シーンを絵札に、名台詞をそのまま読み札にしたかたる札が含まれることもある。また、作品中の名台詞だけで構成した『名台詞かたる』もあり、いずれも作品のストーリーのみならず、印象的なシーンや台詞をある程度記憶する必要がある。
- (8) かたる札作成に際しては、保育教材として利用すること、研究資料として利用することを、学生に口頭で説明している。
- (9) 五七五の定型から外れた読み句に四・四・五があり、40組中5組と全体の12.5%を占めている。例として「ねばねば/なっとう/おいしいな」などが挙げられるが、これは七五調の二句構成のものを三句構成に変形したものである。初句の七は分けるとすれば三・四であるが、初句に畳語のオノマトペを配したために四・四・五の三句になったものと考えられる。

引用文献

- 1) 藤野良孝(2016)「幼児・児童教育向けオノマトペカルタの検討」『情報学研究』第25巻, pp.1-7
- 2) 原子はるみ・奥野正義(2007)「保育活動におけるオノマトペ表現の有効的機能に関する一考察」『北海道教育大学教育実践総合センター紀要』第8号, pp.167-174
- 3) 池田邦子(2012)「『保育教材』としてのかたる—大正・昭和初期における『幼児の教育』誌の掲載記事を手がかりとして—」『びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部研究紀要』第4号, pp.29-44
- 4) 池田仁人・戸北凱惟(2005)「低学年児童の『気付き』の表現に関する研究—生活科におけるオノマトペの機能—」『理科教育学研究』Vol.45 No.3, pp.1-10
- 5) 教育出版『ひろがることば 小学国語2下』(平成27年度版) pp.104-105
- 6) 教育出版『ひろがることば 小学国語2下』(平成27年度版) pp.12-29
- 7) 文部科学省(2017)『幼稚園教育要領』p.16, 厚生労働省(2017)『保育所保育指針』p.43, 内閣府(2017)『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』pp.58-59
- 8) 文部科学省(2017)『幼稚園教育要領』p.16, 厚生労働省(2017)『保育所保育指針』p.45, 内閣府(2017)『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』p.61
- 9) 小野雅弘編(2007)『擬音語・擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』小学館
- 10) 大久保愛・川又瑠璃子(1982)「就学前幼児の語彙—4児による日常生活語の実態—」『研究報告集—3—』国立国語研究所, pp.237-326
- 11) 作野友美(2015)「保育者の用いる擬音語に関する研究」『大阪芸術大学短期大学部紀要』第39号, pp.83-90
- 12) 佐野仁美・岡林典子(2019)「オノマトペを用いたリズム創作の可能性—協働性に着目して—」『京都橘大学研究紀要』第45号, pp.83-95
- 13) 東京書籍『新編新しい国語2下』(平成27年度版) pp.100-103

(2019年9月10日受付)
(2019年12月12日受理)

